

「子どもの姿」を理解すること

—乳児保育Ⅱにおける模擬保育の概要を通して—

林 富公子

HAYASHI Fukuko

指導案の立案に必要である「子どもの姿（子ども一人一人の発達過程・状況、及び子どもの興味関心など）」の重要性に学生が気付くことができるように、その1つの方法として乳児保育Ⅱの授業内で模擬保育を行った。また、それを通して学生の学びについて考察した。結果、学生がこの模擬保育を通して、学生は子どもの姿を理解するために必要なこと①子どもの興味・発達、②子どもの行動の裏にある思いに耳を傾けることの重要性を認識するきっかけとなった。

キーワード：子ども理解、模擬保育、保育者養成

1. はじめに

昨年度の論文¹⁾で、学生が行う指導案の立案に対する調査をした。そこでは学生が指導案の立案に苦勞をしている様子が改めて浮き彫りになった。その理由として、以前の研究²⁾でも言及したように学生は指導案の主活動の内容だけに目が向いてしまっていることがあった。

一方で、指導案の立案は保育所保育指針³⁾によると次のような流れになっている。

(2)指導計画の作成

ア保育所は、全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成しなければならない。イ指導計画の作成に当たっては、第2章及びその他の関連する章に示された事項のほか、子ども

一人一人の発達過程や状況を十分に踏まえるとともに、次の事項に留意しなければならない。

(中略)

ウ指導計画においては、保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。また、具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切にして適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。

(下線部筆者)

この内容から、指導案（指導計画）の作成には次のような流れがあることが分かる。

第一に、一人一人の発達過程や状況（子どもの姿）を十分に踏まえること。

第二に、生活の連続性、季節の変化などを考慮すること（保育の流れと季節・及び時期）。

第三に、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。

第四に、適切な環境構成をすること。

第五に、子どもが主体的に活動出来るようにすること。

この様な流れは、保育実習指導Ⅰや他の授業でも教授している。しかし、学生は指導案の立案にあたって主活動の内容から考えているという現実がある。この様な方法で立案していると、保育における「ねらい」も「主活動の内容」も子どもの実際の姿とはかけ離れた的外れなものになってしまう可能性が出てくる。

このように、学生が「主活動の内容」から考えてしまう理由として、普段あまり子どもと関わっていない為に「子どもの姿」を想像できないことが考えられる。

だから、学生は主活動の内容を考える時に、取り敢えず授業などで取り組んだ内容の中から「自分が取り組めること」、「自分がやってみて楽しかったこと」など、自分を中心に保育の立案をしてしまう。このように立案するので、その指導案の内容はあまり「子どもの姿」や「子どもへの思い」というような「子どもを中心」としたものにはならない。

従って、部分実習などにおける反省も自分自身の指導にばかり目が向き、保育が自分の指導案通りにいったら「上手くいった」と考え、思い通りにいかなかったら「上手くいかなかった」と思う事が多くなるのではないだろうか。

一方で、この指導案の立案において学生が「子どもの姿」を想像したり、重要性に気付いたりすることは非常に難しい事柄であると推察される。なぜならば、学生が「子どもの姿を想像（予想）すること」は家に乳幼児がいたり定期的にアルバイトやボランティアで頻繁に子どもたちと関わっていたりしない限り、限りなく難しい事であるからである。しかし、今の学生の姿を見ていると授業時間も多く、ボランティアなどを通して日々子どもと関わる時間を保育現場などで持つことは難しい⁴⁾。

そこで、本学や多くの養成校では授業において子どもと関わる時間を少しでもとるために様々な取り組みをしている⁵⁾と思う。しかし、例えば見学実習などを通して保育現場に行ってみても普段の生活とあまりにも違う場所であるため一日の保育の流れを追うことに一杯で子どもの姿にまで目が向きにくいのではないかと思う。

ではどうすれば学生は「子どもの姿」や「子どもを主体」に立案することの重要性に気付くのだろうか。これに学生が少しでも気付き、目を向けるチャンスがないのだろうかと考え、日々の授業内で解消できないか考えた。

筆者はこの解決方法として、保育事例を読み子どもの気持ちを考えるケーススタディ、学生が保育者役などを演じる模擬保育などを考えた。しかし、今回この疑問を持った始まりが、指導案の立案であったことを思い出し、指導案を考えることが必要とされる模擬保育の中でこの問題に向き合ってみようと思った。

このような事から、筆者が担当教員である乳児保育Ⅱの授業内で模擬保育を行う事にした。そして、その中で、模擬保育の方法を筆者自身が試行錯誤する中で学生自らの「子どもの姿」の重要性や子どもを主体的に考え保育を考えることに対する気付きを支援しようと考えた。

2. 方法

時期：2017年4月～8月

対象：乳児保育Ⅱ受講者⁶⁾

3. 乳児保育Ⅱの授業の流れ

乳児保育Ⅱは次の表のような流れで展開される。まず①・②回目で乳児保育Ⅰの振り返りと、子どもを主体的に考える保育の重要性について話をする。③・④回目では子どもの姿を捉えるときの一つの目安として乳児保育Ⅰで習った3歳未満児の発達とその配慮について再確認する。⑤～⑭回目が模擬保育についてで、⑮は①

～⑭の復習である。

Table1 乳児保育シラバスの概要

- ①保育現場における養護
- ②乳児保育における基本的視点
- ③乳児の発達と配慮（前半）
- ④乳児の発達と配慮（後半）
- ⑤乳児と絵本（講義）
- ⑥乳児と絵本（模擬保育に向けた指導案の作成）
- ⑦乳児と絵本（模擬保育と記録）
- ⑧乳児と遊び（講義）
- ⑨乳児と遊び（模擬保育に向けた指導案の作成と準備）
- ⑩乳児と遊び（模擬保育）
- ⑪乳児と遊び（記録）
- ⑫乳児と生活（講義）
- ⑬乳児と生活（模擬保育に向けた指導案の作成）
- ⑭乳児と生活（模擬保育と記録）
- ⑮まとめ

Table1 から分かるように実際に模擬保育を予定したのは⑦、⑩、⑭回目の3回である。この理由は、各模擬保育の反省を一人一人が活かして欲しいからである。また、今まで取り組んだことがあると思われる「絵本」を最初のテーマにした理由は、この授業における模擬保育の大まかな流れを学生自身が確認できるきっかけになると思ったからである。

そして学生が「絵本」の模擬保育を通して本時における模擬保育の流れやねらいを理解し、「遊び」や「生活」の模擬保育を行う事とした⁷⁾。このように3回の模擬保育を通して、学生が子どもの姿に気付いていけるように配慮した。

各模擬保育は「講義→指導案の作成→模擬保育→感想・反省⁸⁾」の順になっている。また、指導案の作成を前に講義でその活動の配慮事項などを再確認する時を授業内で持った。

4. 乳児保育Ⅱの日々の流れ

各回の乳児保育Ⅱは主に次のような流れで行っている。

- ① 出欠確認と授業シート⁹⁾ (table2)の返却
- ② 授業シートの質問¹⁰⁾
- ③ 本日のテーマ
- ④ わらべうた¹¹⁾ (①～⑩回のみ)
- ⑤ 授業シートの記載
- ⑥ 授業シートの回収

Table2 授業シートのフォーマット

乳児保育Ⅱ授業シート					学生番号	名前
回	日にち	配布 資料	課題	今回の授業を通しての 感想・学び・発見・疑問・質問など		担当確認 印
第1回		有・無	有・無			
第2回		有・無	有・無			
第3回		有・無	有・無			
第4回		有・無	有・無			
第5回		有・無	有・無			
第6回		有・無	有・無			
第7回		有・無	有・無			
第8回		有・無	有・無			
第9回		有・無	有・無			
第10回		有・無	有・無			
第11回		有・無	有・無			
第12回		有・無	有・無			
第13回		有・無	有・無			
第14回		有・無	有・無			
第15回		有・無	有・無	まとめ		

5. 模擬保育に向けた指導案の作成と準備とは

今まで筆者が取り組んできた模擬保育の方法はだいたい次のようなものであった。

その1：学生が個人個人で指導案を書き、翌週以降に担当になった学生が他の学生の前でその案を基に模擬保育をする。

その2：グループで1枚の指導案を書き、翌週以降グループで保育者役と子ども役に分かれて模擬保育をする。

今回は、授業内で3回だけ模擬保育をするので¹²⁾、1人ずつ個人で指導案を書いては十分な模擬保育をする時間¹³⁾を確保することが難しいと考えた。そこで、その2の方法で取り組むことにした。しかし、その2の方法で模擬保育に取り組むとなるといくつかの問題点が予想された。

第一に、グループ内で余り話し合わず、保育者役の学生が一人で指導案を書くこと

第二に、「子どもの姿」などに注目せず内容から指導案を立案すること

この様な予想が模擬保育に取り組む前から筆者の中で出てきたので次のような流れで指導案の作成をするようにした。

- ①グループ分け
- ②指導案作成の前に
- ③役割決め（くじ引き）
- ④保育者役：指導案の作成
- ⑤子ども役：子どもの姿記載表の作成

①グループ分け

当初は、3回とも同じ学生でグループを組もうと考えていた。しかし、初回の「絵本」時にあるグループでは②の「指導案を作成する前に」のプリントをたった一人の学生が取り組んでいた事があったので、その学生の負担が続くと考え、毎回違うグループの編成にした¹⁴⁾。

②指導案作成の前に

いきなり指導案を配布すると、学生は今までと同じように「子どもの姿」をほとんど考えずに立案することが予想された。そこで、「指導案作成の前に（Table3）」というプリントを配布し指導案を書く前段階の活動を行うことにした。

「指導案作成の前に」のプリントに取り組む前に、クラス全体に注意事項として以下のことを伝えた。

- ・必ず上の欄から書いていくこと¹⁵⁾
- ・グループで相談し、全員で取り組むこと

この2点が学生達に出来ているか確認する為に筆者は各グループの近くに行き様子を見守ると共に、声掛けを行った。

に、声掛けを行った。

Table3 指導案作成の前に

乳児保育Ⅱ ○○模擬授業準備+A1J14	
作成日	月 日 曜日 時間目
○○の指導案作成の前に	
クラス	グループ名
メンバーの名前	
作成する子どもの年齢(乳児保育の指導案のため3歳未満児でお願いします)	
歳児	
普段の子どもの姿(好きな遊び、保育士や友達との関係などを月例も併せて表から考える)	
ねらい	
主な活動	
その活動をする時間帯(場面)	
その活動をしているときの子ども様子(予想)	
確認印	

③役割決め

当初、学生達が保育者役の負担が最も大きいと考えていたこと、先に役割を決めると保育者役の学生のみが「指導案作成の前に」のプリントに取り組むことになるので「指導案作成の前に」のプリントができたグループから、役割（保育者役と子ども役）決定のくじ引きをするようにした¹⁶⁾。

④指導案の作成（保育者役）

「指導案を作成する前に」、のプリントを参考に保育者役は指導案の作成をするように伝えた。指導案の用紙は本学の実習で使用するTable4のタイプのものを使用した。

また、今回の模擬保育の目的は指導案の書き方ではなく、あくまでも「子どもの姿」や「子ども

が主体とした保育」を考えるためのものであった17)。そして、授業内で出来る限り模擬保育の準備も終わることを推奨していることもあり18)、保育者役が記載する指導案は細かく書くのではなく保育の流れが1枚にまとまるように書くように伝えた19)。

Table4 指導案の用紙

日案 観察実習・参加実習・責任実習(部分・半日・全日)			
年	月	日	曜日
		天気()	学籍番号()
氏名()			
担当クラス		組()	歳児 男児 名・女児 名・計 名
ねらい		内容	
時間	環境構成	(予想される)子どもの活動	保育者の援助・配慮
反省・考察・質問			指導助言

*実際に使用した指導案の用紙は「反省・考察・質問」と「指導助言」の箇所のスペースの割合がTable4に比べ小さくなっている。

⑤子どもの姿記載表 (子ども役)

子ども役は、「指導案作成の前に」の「普段の子ども姿」を参考に、各々が演じる子どもの姿をグループ内で話し合い「子どもの姿記載表 (Table5)」を作成するように伝えた20)。

学生の様子から、1回目の絵本の時は子どもの姿記載表の記入において子どもの月例や発達、その活動をしている時の姿ではなく、子どもの名前や愛称で悩む姿も見られた21)。学生が自分達で、子どもの月例、発達、姿を考えることの重要性に気付いてほしかったので、特に口頭で注意をすることはなかった。

Table5 子どもの姿記載表

子どもの姿記載表		グループ名	メンバーの名前
自分の名前	子どもの名前と愛称	年齢と月例	発達の様子
			提出日 月 日 曜日 授業日
			その場での子どもの姿

この、①～⑤の作業を全ての回(絵本、遊び、生活)の「模擬保育の指導案の作成と準備」で行った。

6. 模擬保育当日

模擬保育当日は、保育者役がじゃんけんをし、勝ったグループから模擬保育を行うこととした。また、模擬保育時の環境構成はその時に模擬保育に取り組んでいない学生たちも模擬保育を出来るだけ見やすく、そして保育者及び子ども役の声を聞きやすく22)する為に次のようにした。

Table6 模擬保育の環境構成 (絵本・遊び)

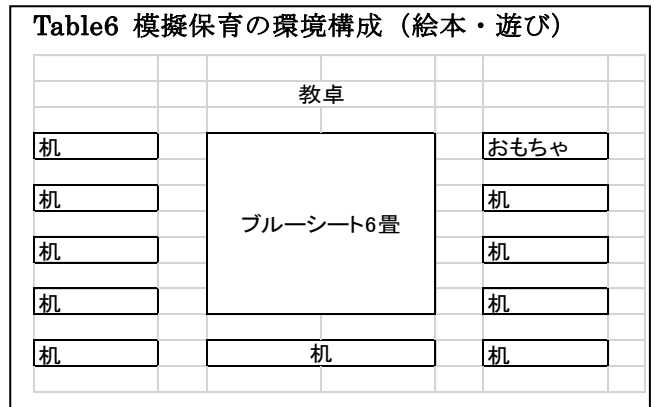
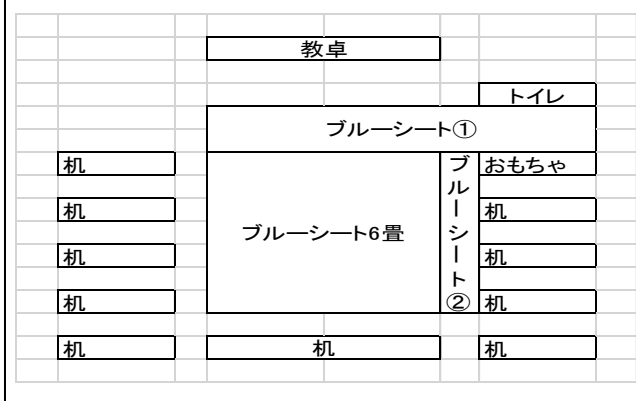


Table7 模擬保育の環境構成 (生活)



「おもちゃ²³⁾」は、「遊び」と「生活」の模擬保育時に用意した。全ての模擬保育は「子どもが主体的な保育」を学生に考えてほしい為、「子どもにさせたり、やってあげたり、してもらってはいけないこと」を設定条件としていた²⁴⁾。

この為、「遊び」においては、自由におもちゃなどで遊ぶ自由遊びの中から遊びを展開していく事が求められた。また、「生活」では①3歳未満児を含む4月の登園時、②1歳児10月の自由遊び片付けと朝の集い（排泄を含む）、③1歳児10月の給食、と3つの場面設定²⁵⁾をし、その中から学生はグループで1つ選びそれに沿った模擬保育に取り組んだ。このようなこともあって、「遊び」と「生活」の模擬保育時に「おもちゃ」は必要だった。

また、「生活」時のブルーシート①、②は、「遊び」の模擬保育をした時に「少し狭かった」という反省が出たので模擬保育の場を少しでも広くすること、生活で排泄場面を取り上げるグループもあったのでトイレの場所を確保することを目的として用意した。

7. 模擬保育の感想と反省

以下に、3回の模擬保育に対するその感想や反省のごく一部を紹介する。

①保育者役

保育者役をやって、絵本を読む前に手遊びを取り入れたらよかったと思った。いろんな子どもがいるので、一人ひとりに合わせた対応が出来るようになりたいと思いました。

この反省からは次の2つの事柄が分かる。第一に、絵本を読む前に手遊びに取り組んでいなかった為に、「絵本」の模擬保育が上手くいかなかったと学生が感じている事。第二に、自分が保育者役として「絵本」の読み聞かせをした時に、子ども役の姿を想像していなかった事。

このように保育者役の反省は、1回目の「絵本」の模擬保育時においては、模擬保育に取り組んでみたが、自分が想像するように行かなかった為、実際の保育方法として次回の方策を考えるものと、子どもの姿に対する予想不足を考察するものが多かった。

「遊び」の時、保育者役をしたのですが、本当に難しかった。自分がその年齢にあった遊びを考えられなかったのが失敗の原因だったと思う。

ここでは、年齢に沿った遊びを考えることができなかったことが反省されている。これは、学生が今まで「遊び」の模擬保育や部分実習をする場合、幼児を対象としたものが多かったことが予想された。だから、学生は0～2歳児を対象とした模擬保育であっても3歳児以上を対象とした内容を行ってしまい、模擬保育が上手くいかなかったと感じたことが予想された。

自由遊びの時の先生役をしたけど子どもが興味を持てるように新聞紙を出してくるのが難しかったです。千切ったり、破いたり子どもたちにかけるなど、子どもたちが最初から新聞紙に触れるようにしたらもう少し興味を持ちやすかったかなと思いました。

「子どもが興味を持てるように新聞紙を出してくるのが難しかった」とあるように、子ども自ら「新聞紙」という遊びに関心を持つことが出来る

様な素材の出し方についてもここでは言及している。

「新聞紙」を使った「遊び」の模擬保育は各クラス多くあった。しかし、同じ「新聞紙」というテーマでも、時間が余ってしまうグループと時間が足りなくなってしまうグループがあった。理由として、この感想にも出ているように第一に子どもが興味を持てるような新聞紙の出し方をしているか、第二に新聞紙の様々な遊び方についても考えていたか、ということに対して各グループに違いがあったように思われた。

この様に、「遊び」以降になると、「子どもの姿に目を向けていなかったこと」、「子どもの興味に沿っていなかったこと」と言うように、子どもに目を向けた反省が出てきた。

一方、次のような感想もあった。

実習に行って、保育士の援助は見てきたけど、子どもがその行動しているその気持ちに対してどのように保育者が援助しているのかは全然分かっていなかったと気付きました。

ここから、保育者は同じように子どもに「話しかけている」が「子どもの行動や発言に対して保育者はなぜその言葉を選んでいるのか」、「行動の裏にある子どもの気持ちをいかに考察して子どもに対する援助を行っているのか」というように、実習で保育士が子どもに行っている具体的な「援助」は見ていたけど、その裏にある「配慮」については余り見ることができていなかったことを学生自ら気付いたことが伺えた。

このように保育者役を行う中、保育を展開していく上で重要な、「子どもの年齢・発達を意識すること」、「子どもが興味を持てるような導入とその展開」や「子どもの気持ちを考察した保育者の援助・配慮」について考えることができたのではないかと思われた。

②子ども役

子ども役は思っていたより難しく、子どものことをよく見ていないと出来ないなと思いました。

子どもの成長・発達にあった演技をすることがとても難しかったです。保育者役も経験したのですが、子ども役のほうが大変だったなと感じました。子どもの動きを書いていると、同じ1歳児でも、何ヶ月か違ってきたら違うことが出来たりするので、一人ひとりをきちんと理解することも大切だなと思いました。

保育者役をすることも大変だと思ったけど、子ども役を演じて一番感じたことは、子どもの月例や年齢にあった発達や様子を理解できていないと子どもがどのような行動をとるのか予想し、保育者として配慮することが出来ないということです。

どのテーマでも、実際の子どもの姿をきちんと見ていなかったり、発達を理解できていなかったりで、どのような遊びをしたら良くてどこまで言葉が話せて保育者と遊ぶことや甘えること、求めていることなどが分からなかったのも、難しかったけど、逆に自分自身が子どもの発達などをどれだけ理解しているのかが分かったきっかけとなり、何を学ばなければいけないのかを考えられる場であったので、模擬保育をして良かった。

模擬保育に向けた指導案の作成や準備を始めた当初、子ども役の学生は⑤子どもの姿記載表でも記したように自分が演じる子どもの名前をどうするのかということに悩む姿が多くあった。このことから学生は「保育者役は準備などが大変そうだけど、子ども役はその場で何とか出来るだろう」と思っているように感じられた。

しかし模擬保育を行う中で、その時の子どもの姿をイメージしなければ子ども役として成り立たないことを学生自身痛感したことが伺えた。そして、学生はその子どもの姿をイメージすることができるように、テキストや授業などにおいて子どもの成長・発達を学ぶ意味を知ったのではないかと考えられた。

子ども役をしたときは、子どもの気持ちになって保育者と関わった時、自分の名前が呼ばれた時の嬉しさや、先生と目が合わない悲しさなど色々な感情を覚えました。保育者は一人で沢山の子どもを見ないといけないので対一の関わりは少ないのですが、子どもは自分一人に関わってもらったこんなにも嬉しいと感じると知りました。数十人いる中の一人ではなく、一人一人大切に生きていきたいと思いました。

保育所保育指針では保育所における養護の理念として保育士の「一人一人の子ども」に対する援助や関わりの必要性が述べられている²⁶⁾。

特に3歳未満児については指導計画の作成においても「一人一人の子どもの生育歴、心身の発達、活動の実態等に即して、個別的な計画を作成すること」²⁷⁾とあるように「数十人いる中の一人」ではなく「一人一人の子ども」に目を向けることが大切になってくる。

学生自身が子ども役として保育者役と関わる中で、保育の場における保育者の子どもに対する関わりが子どもの気持ちや思いに与える影響を感じることができたことが伺えた。

はじめは子ども役だから普通に子ども役をしていけばよいだろうと思っていました。しかし、実際にいざやってみると「子ども役ってこんな感じでよかったのかな？意外と難しい」と思いました。なぜ子どもはこんなことをするのだろう、とたまたまに理解できない行動をします。それを考えるには、その子になりきり、なぜこんな行動をしたのか自分自身なりきらないと、その子の気持ちは分からないし、理解できないので、なりきらないといけないと言うことが今回模擬保育をしてみて思いました。

子ども役をするときに、遊んでいる姿一つにしても、読み聞かせの時にしても、実際の子どものようになりきるのが難しかったです。その時、子

どもはどんなことを考えたのだろうと考えることが出来ました。自由遊びだからといって、ただそのまましておくのではなく、何してるの？何したい？と声を掛けたり、子どもの興味をひきつけられるようなものを出したり考えたりすることも大切だと改めて感じました。

学生が子どもの行動だけではなくその根底にある思いや気持ちを保育者として理解していくことの必要性に気付いていったことが予想された。また、自由遊びの時ににおいても、子どもが興味を持てるような「環境」や「関わり」を考え、行うことが求められることが大切であると学生が感じている様子が伺えた。

8. まとめと今後の展望

今回、学生「子どもの姿」に対する気付きを促そうと思い、模擬授業の方法を見直した。

結果、学生には次のような気付きがあった。

第一に、模擬保育をする中で保育者役に取り組むことで、保育の展開方法だけではなく、子どもの興味や子どもの発達を考えなくてはならないこと。

第二に、保育者の援助と言っても子どもの気持ちに対する配慮を考える必要があること。

第三に、学生自身が子どもを（発達や様子など）あまり分かっていなかったということ。

第四に、子どもの気持ちに思いを馳せることが必要であること。

第五に、子どもが興味を持てるような「環境」や「関わり」を考える必要があること。

このように、学生自身が「子どもの姿」の必要性や、「子どもの気持ちを考えること」の重要性を感じる様子もあった。

しかし、「絵本」の当初からこのような感想が出てきた訳ではなかった。

模擬保育を3回して、初めは大人が子どものフリをして何の意味があるのだろうと正直思っていました。だけど、思っていた以上に、みんな子どもになりきり、実習先で実際にあった出来事をリアルに表現していて、それに対する保育者の子どもへのかかわりなどをじっくり見る中で、「この時はこうすればいいのか!」、と自分自身の参考になったり、「自分だったら違う言葉がけをするなあ」、と感じたりする中で、模擬保育の大切さや模擬保育をする意味を理解することが出来ました。また、子どもの立場となり子どもの気持ちになることで子どもの気持ちを理解できる良い機会にもなりました。

この感想にもあるように、「絵本」の模擬保育時には、準備日も当日もあまり今回の模擬保育のねらいが分かっていない様子が学生の姿から伺えた。そこで、この模擬保育を少しでも充実させるために子ども役に戸惑うグループには担当教員が飛び入りで子ども役として参加し、実際の保育で関わった子どもたちの様子を演じた。

担当教員が子ども役を始めた当初は学生達も驚く姿があった。だから1回目「絵本」の振り返り時、2回目の「遊び」及び3回目の「生活」の模擬保育準備日に、今回の模擬保育のねらい²⁸⁾と、子ども役が子どもを演じなければ今回の模擬保育のねらいが達成されないことを繰り返し伝えた。

また、「絵本」や「遊び」の模擬保育時には子ども役なのに大人と同じように全て言葉で説明しようとする学生も見られたので、クラス全体に対し演じている子どもの年齢をもっと意識して演じるように言葉掛けをした。そして、併せてその年齢の子どもたちの子どもは実習などでどのような様子であったかについて考える時をクラスで持った。

そういったことから、この感想にあるように少しずつ、学生の意識が変わりだし「子どもの姿記載表」の子ども名前や愛称で悩む姿はなくなった。そして年齢・月齢を意識し授業テキストや配布した補足プリントの発達表で調べたり、実習時の子どもの姿を話し合うグループが増えだした。

また、模擬保育の前に子ども役で作戦タイム（だれがどのように演じるかの相談）を持つグループも出始めた。

このように学生が「子どもの姿」や「子どもが主体」ということを意識するというねらいは少し達成されたかもしれない。

一方で保育所保育指針には「子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。²⁹⁾」とある。このことから、テキストなどに載っている子どもの発達の様子を知りつつも、目の前にいる子ども一人一人の姿を見て関わっていく事が保育者に求められることが分かる。今回の模擬保育においても、学生が「一人一人の子どもの姿」を見る重要性に気付く様子も見られた。そこで、今後の授業の中でも「発達過程を知りつつ子ども一人一人の個人差についても考えること」の重要性を学生が学んでいけるようにしていきたい。

次の展開として、「今回は子ども役しかなかった」という学生もいたので、次年度は模擬保育の回数についても検討し、内容の充実を図りたい。

1) 林富公子 2016 実習の実態と立案指導 夙川学院教育実践研究紀要 第9号 p33-39

2) 林富公子 堀井二実 2011 立案指導についての一考察 2-保育所実習に取り組んだ学生の立案に対する実態調査- 園田学園女子大学論文集 第45号 p243-257

3) 厚生労働省告示百十七号 2017 保育所保育指針 p9,10
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> (2017/08/21 アクセス)

4) 本学にはこの問題などを解決するために3年制があり、3年制の学生は午後3時10分に授業が終了するため比較的、保育所などにおけるアルバイトやボランティアに参加しやすい状況にある。しかし、本学の2年制の学生は午後6時半まで授業があるため日々保育現場などに行くことは難しい

と思われる。

5) 本学では保育実習指導ⅠAの「赤ちゃん先生」や同じく1年次にある付属幼稚園への「見学実習の取り組み」などがあげられる。

尚、「赤ちゃん先生」とは、NPO法人ママの働き方応援隊が取り組んでいる活動の一つで、赤ちゃん和妈妈が教育機関や高齢者施設、企業、団体に訪問し、学び・癒し・感動を共有し、人として一番大切なことを感じてもらう人間教育プログラムである。

<https://www.mamahata.net/company/project/akachansensei> (2017/08/21 アクセス)

また、付属幼稚園の見学実習については「付属幼稚園見学実習について」(林富公子 田中麻紀子 2017 夙川学院短期大学教育実践紀要第10号 p63-69)に詳細に記している。

http://www.shukugawa-c.ac.jp/wp-content/kiyou/educationpractice_no10_8.pdf (2017/08/21 アクセス)

6) 乳児保育Ⅱの受講者は保育士資格取得を目指す学生であり、ほとんどの学生が保育実習指導Ⅰと保育実習Ⅰを習得している。つまり、一度は実習に参加した者たちである。

7) 実際、この3つの模擬保育に取り組むことを学生に伝えたところ、「絵本は実習などで取り組んだことがあるし、遊びも分かる。でも、生活って何をするの?」と言う声も上がった。このことから、「絵本」や「遊び」は実習などで学生が注目してきている事柄であると思われる。一方、「生活」は学生からすると、予想することが難しい事柄であると思われる。

ところで、保育所保育指針では、(2)保育の目標(オ)で「生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと」とあり、保育所では、日々の保育所における生活の中で保育を行っていく事が大切であることが伺える。これらことから、今回の模擬保育では「生活」を取り入れることとした。

厚生労働省 2017 保育所保育指針 p3

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> (2017/08/29 アクセス)

8) 当初は、シラバスにもあるように模擬保育後には記録を書く予定にしていた。しかし、学生と授

業をしていく中で、個人個人で記録を書くよりも今回は模擬保育の感想や反省をすることで、学生達が「子どもの姿から保育を考えること」に繋がるのではないかと思った。そこで、模擬保育終了後に学生の了承を得て記録ではなく感想と反省の時を持った。

9) 授業シートとは、「①学生自身が自分で出欠確認をするもの、②授業時間内などに言えなかった感想や質問を学生が記載し教員と学生を繋ぐもの、③一切評価には影響を与えないもの」である。これを毎時間ごと回収し担当者は確認欄に確認印を押し、翌週各クラスから出た全質問をパワーポイントで発表し考える時をもった。尚、個別性が高い感想については個別に話をするように心がけた。

10) 授業シートの質問は大きく3つに分けることができた。即ち、①前回の授業の内容に関するもの、②保育実習などにおける質問、③その他である。これらの事柄について授業開始時に答えたり、学生と考えたりする時間を持った。

尚、この時間を持つことで学生の授業の理解度について教員も把握することができた。

11) 「わらべうた」(①～⑩回のみ)とは、①～⑩回の授業の中で毎回2個ずつ「わらべうた」に取り組むことである。学生は毎回授業で取り組んだわらべうたに対し、感想や対象年齢などを考えて「わらべうたカード」に記入し、友だち同士で練習することになっている。そして、⑪～⑭回目の間に担当教員に「わらべうたカード」を提出し、「わらべうた」のテストに合格することが推奨されている。

尚、「わらべうたカード」には3歳未満児保育で使用できるであろう「わらべうた」20曲記載されており、学生は対象年齢、取り組んでみた感想などを考えることになっている。

12) 模擬保育の回数を今回3回にしたのは、3歳未満児の発達の様子、子どもの姿に注目することの必要性等の授業内容に模擬保育前に取り組んだことと、各回の準備や反省を授業内で行いたいと考えた結果、3回と言う回数が妥当であると思われるからである。

13) 各模擬保育における時間は「絵本」15分、「遊び」25分、「生活」25分であった。「遊び」、「生活」はその活動の内容から、「絵本」と比べ時間を長く設定した。

14) グループ編成を行う時は、保育者役の学生が被らないように留意した。尚、3回目の「生活」の時のみ学生達も模擬保育の方法に慣れてきた様子が伺えたので、学生達でグループを決めるように伝えた。

15) 子どもの年齢・姿などを学生が意識できるように、「指導案作成の前に」のプリントは上の欄から記入するように伝えた。

16) ここで、役割決めをくじ引きで行った理由は、事前に役割を決めておいたり学生同士で相談をする中で役割を決めたりすると、「指導案作成の前に」のプリントを保育者役の学生だけが考えることになる予想されたからである。

17) 「今回の模擬保育の目的は指導案の書き方ではなく、あくまでも「子どもの姿」や「子どもが主体とした保育」を考えるためのものであった」とは言え、「環境構成」における図の作成時には定規を使用することを伝えた。

18) 学生自身の日々の生活の忙しさや、他の授業との兼ね合いも考え、出来る限り指導案の作成も含めて時間内に終わらせるように伝えていた。

19) 授業内で出来なかったものに関しては翌週の発表までに仕上げてくることとしていた。

20) この「子どもの姿記載表」の作成にあたって学生から当初頻繁に年齢と月齢の書き方についての質問が出た。それは、例えば「1歳児クラスの模擬保育だから、子どもの年齢は1歳〇〇か月で書いたら良いのか」と言うものであった。

しかし、1歳児クラスは、4月1日現在に子どもの年齢が1歳である子どもが在籍するクラスの事を意味する。従って、4月2日になれば1歳0か月の子どもと2歳0ヶ月の子どもが同じ1歳児クラスのメンバーとして過ごすことになる。

つまり、学生がよく考えた模擬保育は6月や10月が多かったため、学生は1歳〇〇か月の子どもと2歳〇〇か月の子どもについて年齢と月齢を記載し、それを基に子どもの発達などを考える必要が出てくる。

この事から学生にとって〇歳児ということの意味があまり分かっていないことが予想されたので、全てのクラスにおいて〇歳児の意味の説明をした。

21) 学生が子ども役を演じるときは自分が関わってきた子どもをイメージすることがあると考えたので、よりイメージしやすいように、子どもの名前や愛称は自分たちで考えることが出来るようにしていた。

22) 「保育者及び子どもの声を聞きやすく」というのは次のような事である。0～2歳児クラスの実際の保育においては、保育者は子どもに優しい口調で語りかけることがあったり、子どもは大きな声で自分の意思を伝えるだけではなくつぶやくこともあったりする。

従って模擬保育においても0～2歳児の保育現場の様子を出来る限り再現しようとする、保育者役・子ども役はいつも大きな声を出している場面ばかりでないことが分かる。だから、模擬保育実施場所から離れて座っていると動きしかその様子が見えないので、模擬保育を行うときの環境構成はTable6及び7にあるようにした。

23) おもちゃの内容は、担当教員が持っている、木のままごとセット、お医者さんごっこセット、布絵本、ガラガラ、木の車や電車、型詰め、2～4ピースのパズルなどである。

24) 保育所保育指針(1)保育所の役割(イ)に「イ保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」、(3)保育方法でも「イ子どもの生活のリズムを大切に、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。ウ子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。」とあることから、保育所における保育の基本は環境を通して、個人個人の発達過程に応じて保育をすることであると分かる。

従って、基本的には保育者が子どもの気持ちや興味・関心、発達過程を無視して「子どもたちにやらせたり、させたり」することがない為、このような条件を設けた。

厚生労働省告示百十七号 2017 保育所保育指針 p2,4 (2017/08/29 アクセス)

25) 学生達が「生活場面」で指導案をいきなり書くことは学生の様子から少し難しいのではないかと思われた。そこで講義時に学生がイメージしやす

そうだったこの3つの活動から選択できるようにした。

26) 生労働省告示百十七号 2017 保育所保育指針 p6-8
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> (2017/11/11 アクセス)

27) 厚生労働省告示百十七号 2017 保育所保育指針 p10
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> (2017/11/11 アクセス)

28) この3回の模擬保育を通したねらいとは、指導案の立案や保育における「子どもの姿」の重要性に気付くことと、「子どもが主体の保育」を考えることである。

29) 厚生労働省告示百十七号 2017 保育所保育指針 p4
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf> (2017/11/11 アクセス)

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は、本学の「乳児保育Ⅱ」の授業において行われた模擬保育の内容に関する実践報告である。指導案を立案する際に子どもの姿が重要であるということを認識するために稿者は模擬保育を実践され、模擬保育の意義や展開方法、学生たちの様子や事後の学生の感想などを詳細に記している。模擬保育の内容等は同じ分野の教員に共有すべき知見であり、また学生たちの取り組みの様子は分野を超えて授業を展開していく中で参考になるものである。

(担当：井本 英子)